平城宮跡第２１７次西発掘調査現地説明会資料

１９９０年９月２９日

奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

〔はじめに〕

調査は、構内道路の撤去・第１次大極殿地区の整備に伴い、第１次大極殿地区の西端、築地回廊部の解明を目指し７月から開始した。調査区は、東西44m、南北41mのＬ字型に設定した。面積は約1440㎡。発掘区の北寄り、構内道路より北の部分は一段高くなっているが、これは大極殿地区の壇の名残であり、遺構の残りもよい。それに対し、南及び西は旧水田が一段低く、遺構の削平ははなはだしく残りは悪い。調査は現在なお継続中であり、今後さらに構内道路の東延長部を調査する予定である。

〔これまでの知見〕

第１次大極殿地区は、既に第27・41・69・72・75・77・87・117 次調査により東半分の様相が明らかになっている。さらに西面築地回廊部分についても、今回より120mほど南で88年度に第192次調査を実施している。

これらの調査によって、本地区は大きくは３時期の変遷が確認されている。その概要は次の通りである。

◎第Ｉ期（平城遷都から天平勝宝５年(753)頃まで）

本地区は南北318m、東西177mを占め、その北３分の１が一段高い壇となり、その南に礫敷の広場が広がる。壇の前面は高さ2m以上の塼積みの擁壁となり、東西両端に広場に降りていくスロープが設けられている。Ｉ期はさらに４期の小時期に分けられる。

○第Ｉ－１期（和銅創建時）

本地区の周囲は築地回廊で囲まれる。回廊の基壇幅は10.8m、側柱の柱間寸法は桁行4.58m(15.5尺)、梁間3.54m(12尺)である。壇上には巨大な正殿と後殿とが建つ。前者は桁行９間(45.1m)・梁間４間(20.7m)の四面廂付き建物で、恭仁京遷都時に恭仁宮に移された大極殿に当たる。

○第Ｉ－２期（神亀～天平12年(740)頃）

南面築地回廊に楼を増築する。

○第Ｉ－３期（恭仁京時代）

大極殿がなくなり、壇上には後殿だけが残る。東面築地回廊は撤去され、南北塀（柱間寸法4.58m=15.5尺）に変えられる。

○第Ｉ－４期（天平17年(745)平城遷都後～天平勝宝５年(753)頃）

第Ｉ期の基壇を踏襲して東面築地回廊が再建される。柱間寸法は、桁行3.95～4.0m(13.2尺)、梁間3.6m(12尺)である。

◎第Ⅱ期（天平勝宝５年頃から延暦３年(784)長岡遷都まで）

本地区は大幅に作りかえられる。南面・北面築地回廊を内側に寄せ、南北の長さは186mになる。塼積擁壁は取り払われ、壇は南に18.3m拡張し石積み擁壁となる。壇上には桁行９間の３棟を南北に並べる正殿を始め、多数の建物が建ち並ぶ。この地区は当時「西宮」と呼ばれたとみられる。

◎第Ⅲ期（大同４年(809)以降）

平城上皇が再興した時期にあたる。基本的に第Ⅱ期の占地を引き継ぐが、築地回廊は回廊部分が撤去され築地となる。壇上には正殿・後殿・脇殿等が建ち、建物の間を塀や溝で区切る。平城上皇期（大同４年～天長元年(824)）とそれ以降の２期に区分できる。

〔主な遺構〕

上述したこれまでの知見によれば、今回の調査区は、西面築地回廊と、壇上から下の広場に降りていくスロープ付近に当たる。検出した主な遺構は、第１次大極殿地区の西面築地回廊・門１棟・塀４条・掘立柱建物５棟・溝２条・土壙７基、それに鍛冶の炉跡群などである。これらを上記の３時期に分けて説明する。

◎第Ｉ期

◇西面築地回廊

当初の側柱の礎石据え付け痕跡は削平により見つかっていない。しかし、築地心から東6.5mの所から掘込地業の跡が深さ65cm残る。西端は攪乱のため確認できない。またこれまでの知見で外側の側柱列の跡に作られたことが知られる、第Ｉ－３期の南北塀跡ＳＡ０１は８間分検出した。柱間寸法は4.6m。なお、発掘区中央の東西壁では、西面築地回廊周辺で厚さ80cmにも及ぶ大規模な盛土による整地を行った様子がみられる。

◇広場・スロープ

発掘区東端で、３段重なった塼およびその北に続く溝状遺構ＳＸ０２を延長16.6m分検出した。溝状遺構は塼の抜取り痕跡である。これは、塼積み擁壁の西への延長部に当たり、スロープの東壁を飾っていた塼の跡である。スロープ自体は削平により残っていない。塼の積み方は、上に行くにしたがい西に傾斜しており、東壁が垂直でなく、傾斜を持っていたことがうかがえる。これより東が広場になり、細かい礫を敷いていた状態がみられる。

◇南北溝

発掘区西南端で、幅2.5～3mの溝ＳＤ０３を検出した。これは第192次調査で検出したＳＤ13402の北延長部と見られるが、深さ30cm程度しか残っていず、かつ9mしか確認できない。この溝は、第１次大極殿地区の東

外郭部の南北溝SD3765と対称の位置に当たる。出土した瓦から、第Ⅱ期の造営時に埋められた可能性がある。

◇土壙

第Ⅰ－３期の築地回廊解体時に、瓦や凝灰岩の切り石等の廃材を捨てたとみられる土壙が、築地回廊の両側で５基ある。

◎第Ⅱ期

◇西面築地回廊ＳＣ０４

２列の側柱列が北の一段高い地区に東は５個、４間分、西は１個残る。桁行4m、梁間は２間で7.2m となり、これまでの知見と一致する。東側柱列の東、心心距離2.6mの所に幅50cmの礫敷きの帯状遺構があり、これが東雨落溝ＳＤ０５の跡とみられる。また北端で幅1.5mの高まりが南北に5mほど続く。これが築地の基底部に当たる。その中心から東雨落溝を折り返すと、築地回廊の基壇幅は11.6mほどになる。西側柱列の西に、心心距離1.6mの所に南北に小穴が2m程の間隔で並ぶ。これらは西側柱の正面及び中間の位置に当たることから、足場穴列ＳＳ０６であろう。

◇広場・スロープ

塼積み擁壁を持つスロープでは塼が抜き取られるが、スロープ自体は踏襲されたとみられる。なお、この時期には正面の塼積み擁壁が壊され、壇が前面に広がり石積み擁壁になる。その位置は本発掘区内に含まれると思われるが、削平のため検出できない。

◎第Ⅲ期

◇西面築地・門

築地回廊はこわされ、築地だけになる。そして門ＳＢ０７が作られる。桁行３間、梁間２間。桁行の柱間は両端が2.7m(9尺)、中央が3.9m(13尺)、梁間は2.7m(9尺)である。東半部でも対称の位置に門がある。

◇北廂建物

発掘区東南端で桁行５間（柱間2.4m=8尺）、梁間３間（柱間2.4m=8尺）の北に廂をもつ建物ＳＢ０８を検出した。これはスロープの位置に重なることから、この段階ではスロープの登り口は北に寄ったと考えられる。この建物の東北端から東に続く溝ＳＤ０９がある。幅1.3m程で、2.2m検出した。なお、本地区の東半部の調査で、対称の位置に北廂建物及び東西溝がみつかっている。

◎それ以後の時期

◇鍛冶の炉跡群

発掘区の東南端において平安～鎌倉期のものと思われる鍛冶の炉跡を20基以上検出した。直径30cm前後のものが多いが、最大のものは80cmを測る。底には坩堝を受ける石を４個置き、壁には石・瓦・塼を並べ、熱・風の反射の効率化を図ったとみられる。炉内から坩堝片が出土した。この他にも壁に塼を立てた炉が２基あり、ここの炉の作り方の一つの特徴と言える。ここからは銅滓が出ているので、銅製品を作っていたことがわかる。

◇掘立柱建物・塀跡

炉跡群の周辺で、４棟の掘立柱建物及び３条の塀跡が見つかった。鍛冶に関連したものであろう。

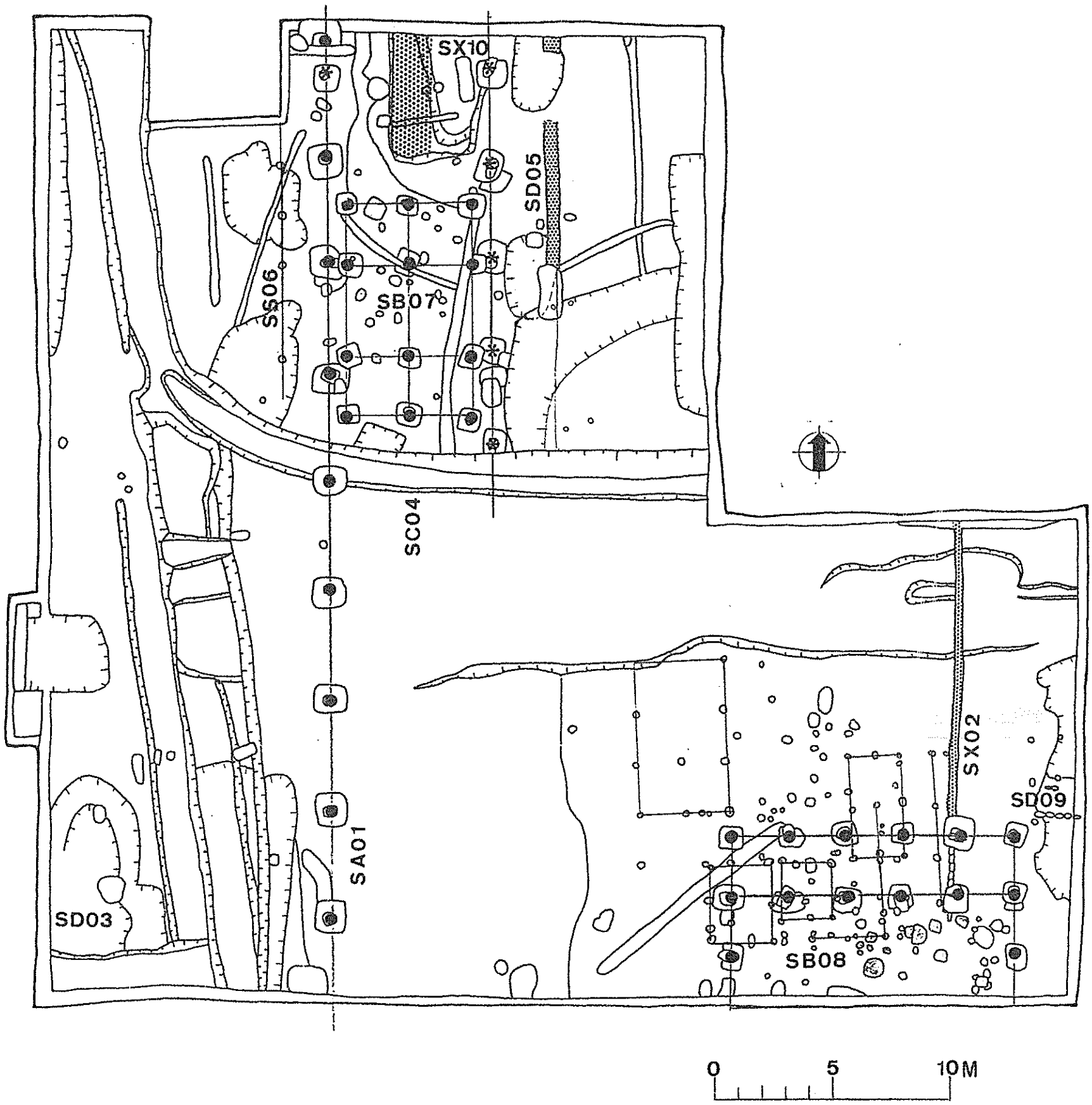
◇墓

発掘区北端の築地跡の東側に、長さ180cm、幅50cmの長方形の掘形を持つ遺構ＳＸ１０がある。中には４個の凝灰岩の切り石を東西方向に置く。鉄釘が縦に刺さった状態で４ヵ所から見つかっており木棺が凝灰岩の上に置かれていたとみられる。

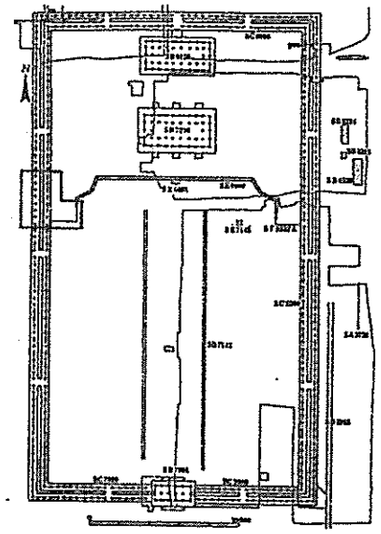
〔まとめ〕

今回の調査発掘区からは埴輪片が出土しており、また東半部の広場では古墳も検出されている。このようにこの地区の近辺には多くの古墳があったと推測できる。そのような地域に大規模な盛り土による整地を施し、第１次大極殿地区が建設されたことが確認できた。また、第１次大極殿地区の西面築地回廊部分の変遷が確認できた。その結果は基本的に本地区の東半部と遺構は左右対称の配置を取り、同じ変遷をたどっていたことがわかった。これにより、今後の本地区の整備に向けての資料が得られた。

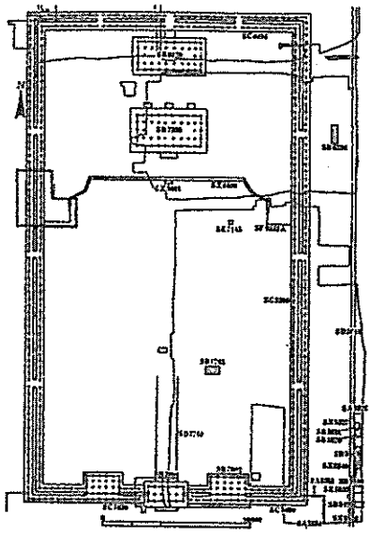
また、平安～鎌倉期の炉跡が多く見つかり、この地域の後世の土地利用のあり方の一端が判明した。



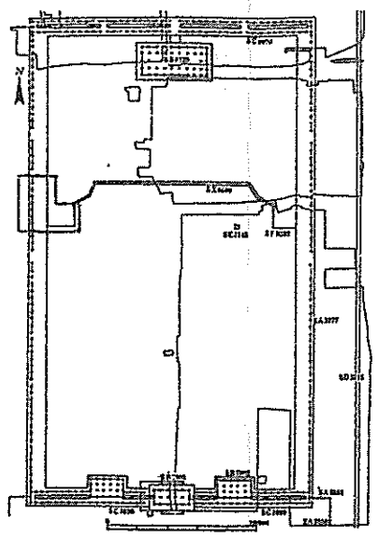

第２１７次西発掘調査主要遺構図



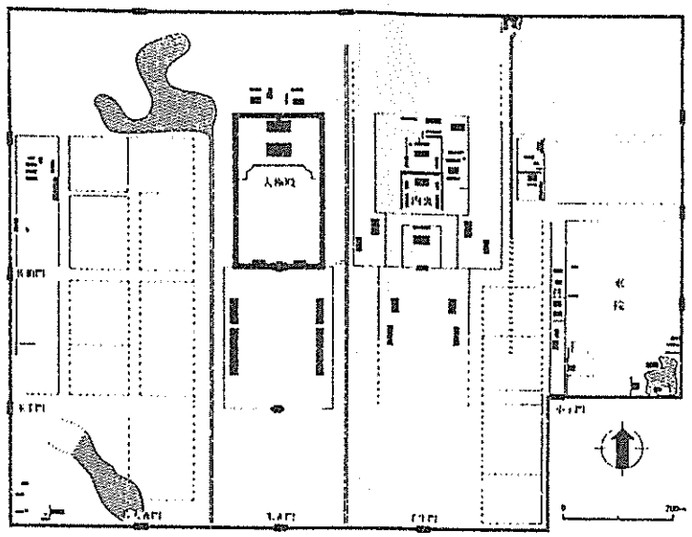
第Ⅰ－1期の主要遺構



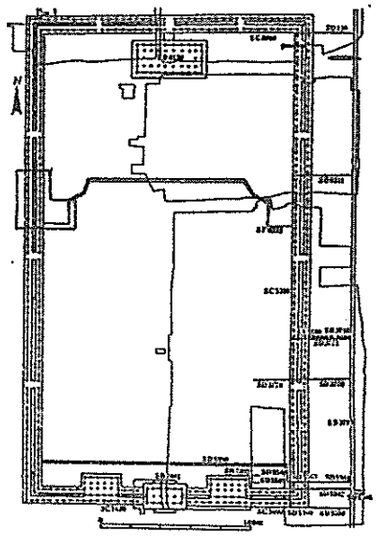
第Ⅰ－2期の主要遺構



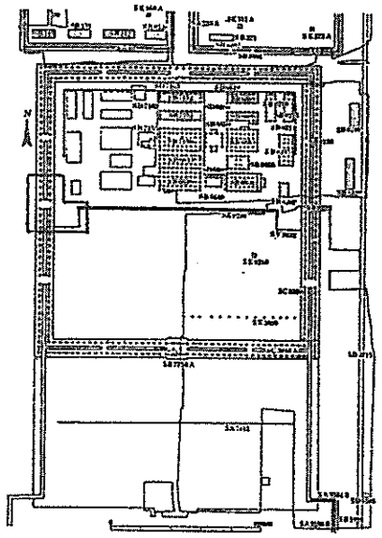
第Ⅰ－3期の主要遺構



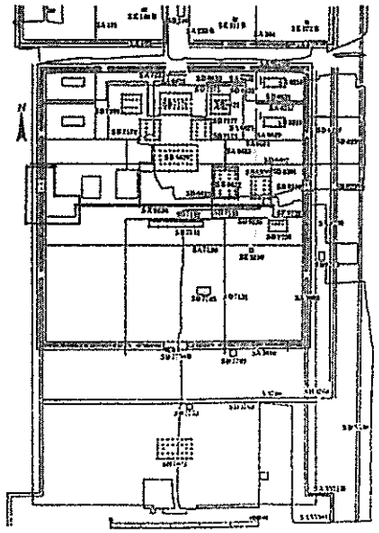
奈良時代前半の平城宮



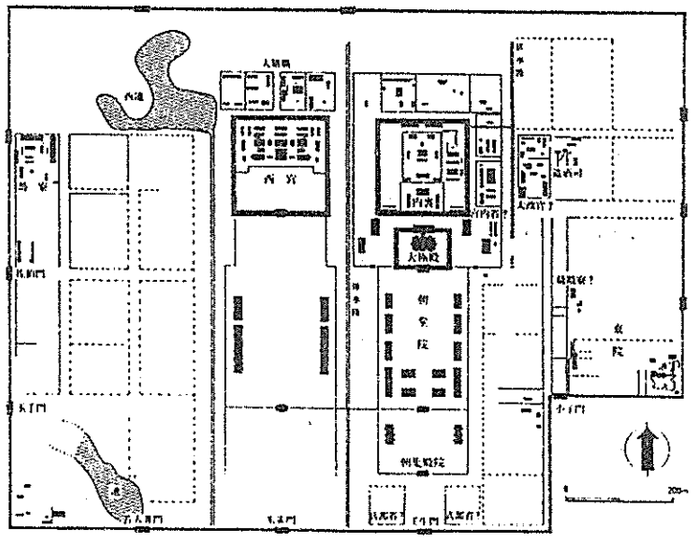
第Ⅰ－4期の主要遺構



第Ⅱ期の主要遺構



第Ⅲ-1期の主要遺構

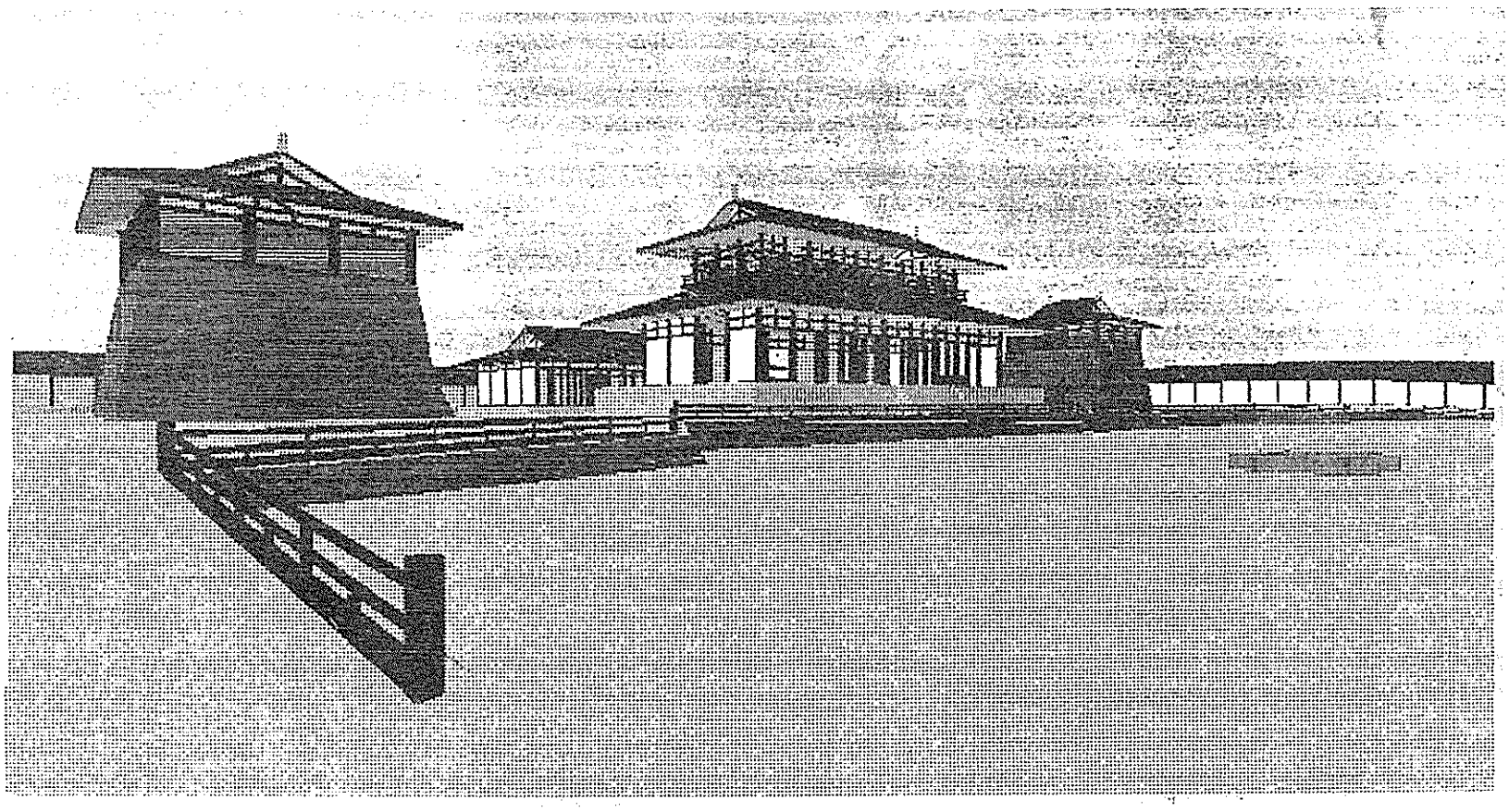


奈良時代後半の平城宮

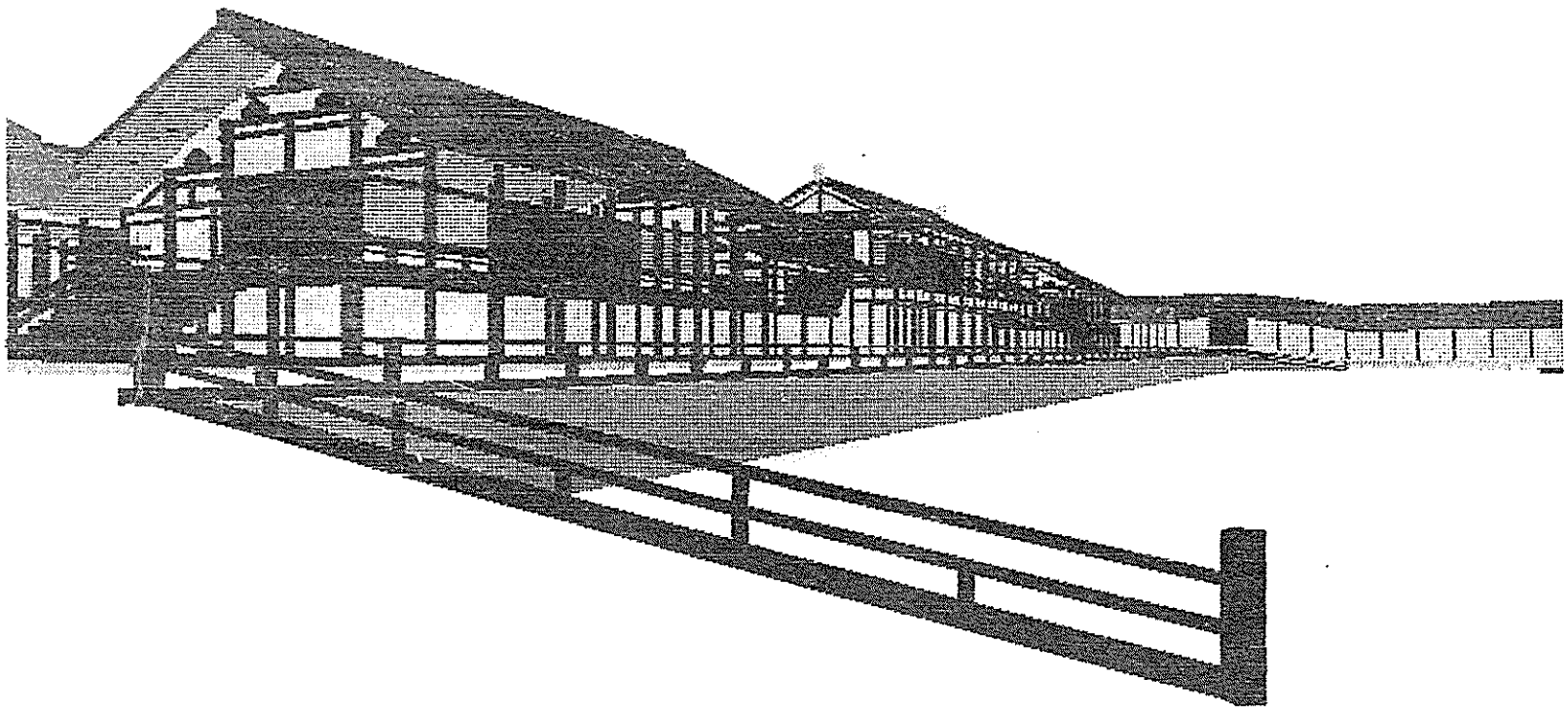
第１次大極殿地区遺構変遷図

第一次大極殿地区復原図 （C. G. による復原）

© 奈良国立文化財研究所



第一次大極殿（奈良時代前半）



西宮の建物（奈良時代後半）